

<研究資料>

主観的類型に基づく日本人マスターズ大会参加者の 阻害要因と阻害要因折衝

伊藤央二¹⁾, 河野慎太郎²⁾

Constraints and constraint negotiation of Japanese Masters Games participants
based on the subjective typology

Eiji Ito¹⁾ and Shintaro Kono²⁾

Abstract

Due to the extraordinary circumstances of the COVID-19 pandemic, the World Masters Games 2021 Kansai as well as the Tokyo Olympic and Paralympic Games have been postponed for a year. To re-energize the Masters Games culture after the COVID-19 pandemic in Japan, this study aimed to examine similarities and differences in constraints and constraint negotiation of Japanese Masters Games participants across the subjective typology. The subjective typology consisted of the following four groups of Masters Games participants: *Games Competitor* (high fun-orientation and high competition-orientation), *Games Enthusiast* (high fun-orientation and low competition-orientation), *Serious Competitor* (low fun-orientation and high competition-orientation), and *Novice* (low fun-orientation and low competition-orientation). An online survey was conducted and usable data were collected from 449 Japanese who participated in masters games within the last three years. The results of importance-performance analysis, analyses of variance, and multiple comparisons indicated that (a) no significant differences in constraints were identified across *Games Competitors*, *Games Enthusiasts*, *Serious Competitors*, and *Novice*, and (b) *Games Competitors* utilized psychological and physical negotiation strategies more than *Novice*. These results suggest that unlike the objective typology, the subjective typology discerns differences in constraint negotiation. These insights can be utilized for the development of effective segmentation marketing for Masters Games promotion activities, which is expected to contribute to the success of the World Masters Games 2021 Kansai after the COVID-19 pandemic.

《keywords》 Masters Games participants, constraints, constraint negotiation, typology,
sport tourism

-
- 1) 和歌山大学観光学部 〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷930
Faculty of Tourism, Wakayama University, 930 Sakaedani, Wakayama City, Wakayama 640-8510, JAPAN
- 2) アルバータ大学 キネシオロジー・スポーツ・レクリエーション学部
Faculty of Kinesiology, Sport, and Recreation, University of Alberta
2-130T, University Hall, van Vliet Complex, 8840-114 St., Edmonton, Alberta, Canada T6G 2H9

1. 緒言

世界的パンデミックをもたらした新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）により、東京オリンピック・パラリンピック競技大会と同様に、ワールドマスターズゲームズ（WMG）関西2021が1年順延となった。この世界最大規模の参加型スポーツイベントには、国内参加者3万人と国外参加者2万人が見込まれていたが（ワールドマスターズゲームズ2021関西組織委員会, online a）、新型コロナの影響によりその先行きは不透明になっている。新型コロナパンデミック前までは、国内において、地域レベルから全国レベルまでのさまざまなマスターズ大会（MG）が開催されていた（彦次, 2018）。例えば、日本最大のMGとして、全13種目の競技（e.g., 水泳, サッカー, テニス, ゴルフ, 空手道）を実施する日本スポーツマスターズ（毎年9月頃開催）が挙げられる（彦次, 2018）。2016年秋田大会では7,538名, 2017年兵庫大会では8,957名, 2019年ぎふ清流大会では8,610名が参加している（2018年札幌大会は北海道胆振東部地震のため中止：日本スポーツ協会, online）。WMG関西2021に向けてマスターズスポーツムーブメントは着実にその高まりを見せていたことを考慮すると（彦次, 2018）、新型コロナパンデミック後にマスターズスポーツ文化を再活性化させるためのプロモーション立案に向けての基礎資料の収集が求められる。

これまでのMG研究の蓄積として、参加型スポーツの本質に基づいた「自己への挑戦」から「楽しみ／満足」までの参加者ののめり込み（関与）が報告されている（Young et al., 2017）。約20年前に、Trauer et al. (2003) は競技／社交志向とのめり込み度の2次元から、MG参加者を「イベント愛好者（Games Enthusiast）」、「真剣な競技者（Serious Competitor）」、「初心者／素人（Novice/Dabbler）」、「観戦者（Spectator）」の4グループに分類した。マスターズ参加者ののめりこみ度ごとに分別し、それぞれのセグメントの特徴から成る「マスターズマーケット」へ効果的にプロモーションするためには、のめり込み度のような社会心理的アプローチに基づく類型が大きく貢献するとYoung et al. (2017) は指摘している。しかしながら、Trauer et al.の4グループに基づく実証研究は非常に限られており、近年、Ito (2020) はTrauer et al.の類型を基に、楽しみ志向と競技志向の2次元から日本人MG参加者を、新たに「イベント愛好者（Games Enthusiast）」、「イベント競技者（Games Competitor）」、「真剣な競技者（Serious Competitor）」、「初心者（Novice）」に分類した。新型コロナにより大会が延期されたWMG関西2021では、MG参加者を類型化し、それぞれのグループの特徴に合わせたセグメンテーションマーケティング

（Higham and Hinch, 2018）が大会を成功へと導く1つの解決策であると考えられる。特に、目標参加者数が国内参加者3万人かつ国外参加者2万人であるWMG関西2021には、特定のグループだけではなく、全4グループからの参加者が見込まれ、各グループにあったプロモーション活動が求められる（Ito, 2020）。例えば、大会前後に行う観光行動を含むサブリメンタル観光行動の相違がグループ間に存在すると考えられ（Ito and Higham, 2020）、各グループの嗜好にあった観光ツアーの提案などを行うことが、参加者確保につながると考えられる。

これまでのマスターズスポーツの参加者増加への取組に関わる国内研究として、組織視点と参加者視点が用いられてきた。前者に関しては、山北・長ヶ原（2018）がイベントマネジメント、山根・竹田（2014）が競技連盟の側面から、参加者増に向けたマスターズスポーツのプロモーションについて考察している。本研究と同様の後者に関しては、児嶋・伊藤（2019）がレジャー参加パターン、Hikoji et al. (2012) が便益／ベネフィット、川西ほか（1993）がライフスタイルといった参加者のスポーツ行動・経験から知見を積み重ねている。これらの参加者視点の研究は、基本的にどのような要因がマスターズスポーツ参加を促進するのかという視点から研究が行われており、どのような要因がマスターズスポーツ参加を阻んでいるのかという逆の視点は等閑視されてきた傾向にある。

この知見のギャップを埋めるため、近年、彦次・伊藤（2018）はWMGオークランドの日本人参加者の阻害要因および阻害要因折衝を質的調査から明らかにしている。阻害要因（constraints）とは余暇・レジャー活動の参与ならびにその楽しみを妨げるものや個人の余暇・レジャー活動の選好の構築を制限する要因であり（Jackson, 2005）、阻害要因折衝（constraint negotiation）とは阻害要因を乗り越え、余暇・レジャー参加を促進するための行動的・認知的戦略のことを指す（Schneider and Wilhelm Stanis, 2007）。彦次・伊藤（2018）以外にも、近年、日本人MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝の研究が実施されている（Ito and Hikoji, 2018；Ito and Kono, 2019；児嶋ほか, 2019）。その中でも、Ito and Kono (2019) は、国外スポーツツーリスト、国内スポーツツーリスト、スポーツエクスカージョニスト（日帰りMG参加者）の3グループに分類し、日本人MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝の類似・相違点を報告している。しかし、ツーリスト／エクスカージョニストの区分は、出入国管理等の統計に用いられるための分類であり、Pearce (1982) はこれを「パスポート型定義（passport-type definitions）」と批判し、観光行動の心理的側面を捉えるためには適した類型でないことを指摘している。このような観察可能な（目に見える）現

象（活動、時間、場所など）を基にした類型は客観的アプローチと呼ばれる一方、心理的側面などの観察不可能な（目に見えない）現象を基にした類型は主観的アプローチと呼ばれる（Kleiber et al., 2011）。MGのプロモーションやマーケティング（Young et al., 2017）や国内スポーツツーリズム研究（Hinch and Ito, 2018）における社会心理的アプローチの重要性を考慮すると、Ito and Kono (2019) が用いたパスポート型定義に基づいた客観的類型に加え、Ito (2020) の類型のような主観的アプローチからも日本人MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝を検証する必要があると考えられる。以上のことから、本研究では主観的類型に基づいたグループ間における日本人MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝の相違・類似点を明らかにすることを研究目的とした。

2. 先行研究の検討

2.1 スポーツツーリストおよびMG参加者の類型化

スポーツツーリストおよびMG参加者は客観的および主観的視点から分類することができる。前者はパスポート型定義と紹介したように、第三者的視点の観光行動に基づくものである。例えば、スポーツツーリズムの文脈において、Nogawa et al. (1996) は24時間以上スポーツイベント開催地に滞在する参加者をスポーツツーリスト、日帰り参加者をスポーツエクスカージョニストと定義している。参加型スポーツイベントを対象に行った調査で、彼らはスポーツエクスカージョニストがスポーツツーリストに比べて典型的な観光行動を行わないことを報告している。また、Nogawa et al. (1996) と同様の類型を用いたGibson et al. (2003) のフロリダ大学アメリカンフットボールチームのファン調査では、スポーツツーリストはスポーツエクスカージョニストに比べて全ての支出において高い傾向であったことが明らかにされている。伊藤・藤森 (2019) はスポーツツーリスト／スポーツエクスカージョニストに同伴者の有無を加え、単独スポーツツーリスト、同伴スポーツツーリスト、単独スポーツエクスカージョニスト、同伴スポーツエクスカージョニストの4グループ間でマラソン大会参加動機と観光動機の比較検証を行っている。このような客観的な類型化はMG参加者を対象にした研究でも、近年用いられている。Ito and Kono (2019) がスポーツツーリストをさらに国外と国内に細分化し、国外スポーツツーリスト、国内スポーツツーリスト、スポーツエクスカージョニストの3グループ間で、日本人MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝を精査している。また、Ito and Hikoji (2019) は国外・国内MG参加経験者を国外MG参加者、国内MG参加者のみの参加経験者を国内MG参加者と分類し、MG参加ののめり込み度と相互協調的幸

福感の関連性をグループ間で検証している。

一方、主観的アプローチに基づき、MG参加者を類型化した研究は非常に限られている。数少ない例外が、競技／社交志向とのめり込み度の2次元を基にしたTrauer et al. (2003) の4類型である。1つ目のグループは「イベント愛好家」と呼ばれ、高いのめり込み度と社交的スポーツ志向を持ち、身体的健康の報酬および参加に伴う社交的交流に動機づけられる参加者である。2つ目のグループは「真剣な競技者」と呼ばれ、高いのめり込み度と競技的スポーツ志向を持ち、競技の成功によって動機づけられる参加者である。3つ目のグループは「初心者／素人」と呼ばれ、低いのめり込み度と社交的スポーツ志向を持ち、競技よりも体力や参加自体が理由でスポーツを行う参加者である。最後のグループは「観戦者」と呼ばれ、低いのめり込み度と競技的スポーツ志向を持ち、知識が豊富でスポーツに興味はあるが、直接的な関与は最小限にとどめる特徴を持つ参加者である。この類型は非常に興味深い、残念なことに実証的エビデンスがこれまで報告されていない。例えば、Ryan and Lockyer (2002) は2000年の南太平洋MG参加者を対象に調査を行い、クラスター分析を行ったところ4つではなく、2つのクラスターのみ（イベント愛好家、スポーツ探求者）に大会参加者が分類された。Trauer et al. (2003) は2002年に開催された同じスポーツイベントの参加者に調査・分析を行ったところ、単一の同質グループの存在が明らかになった。しかし同時に、フォローアップ分析のカイ二乗検定より楽しみ志向レベルが高い参加者グループの約半数以上が高い競技志向を持っていたことを報告している。Trauer et al. の類型で問題と考えられるのが、のめり込み度は単一方向であるのに対し、スポーツ志向が双方向（競技 vs. 社交）である点である。MG参加者の中には、競技性および社交性の両面を求める参加者が存在することが十分に考えられる。また、彼らの調査結果から、参加者の中でMG参加を、「競技 vs. 社交」ではなく、「競技 vs. 楽しみ」といった視点から捉えられていることが報告されている。加えて、MG参加者を対象とする類型において、観戦者といったグループは不相当であると考えられる。

これらの問題を踏まえ、Ito (2020) は「楽しみ志向」と「競技志向」の2つの次元を基に、日本人MG参加者の類型化を試みている。その類型手法には、消費者の満足度と品質評価の2次元から効果的なマーケティング戦略を立案するためのImportance-Performance分析が用いられている（Martilla and James, 1977）。Importance-Performance分析は、観光地、ホテル、レストランなどを対象とした観光マネジメント分野の研究でも、その簡潔かつ明瞭さから頻繁に用いられてきている（Lai and Hitchcock, 2015）。Ito (2020) のImportance-Performance分析の結果から、MG参加者

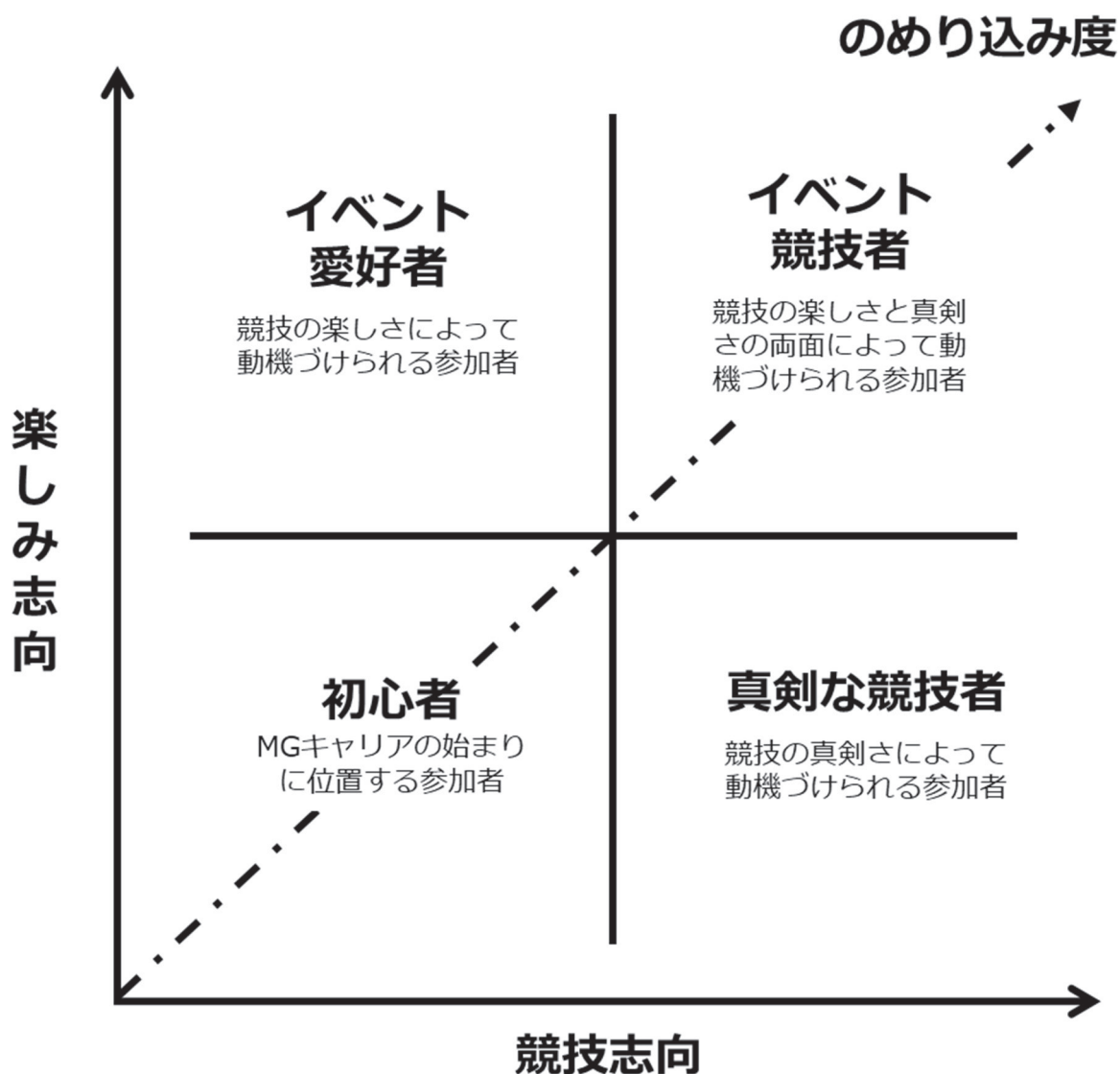


図1 MG参加者の主観的類型 (Ito, 2020)

を競技の楽しさと真剣さの両面によって動機づけられる「イベント競技者」(高楽しみ志向・高競技志向), 競技の楽しさによって動機づけられる「イベント愛好者」(高楽しみ志向・低競技志向), 競技の真剣さによって動機づけられる「真剣な競技者」(低楽しみ志向・高競技志向), MGキャリアの始まりに位置する「初心者」(低楽しみ志向・低競技志向)の4グループが報告されている(図1参照)。Ito (2020)の研究では、4グループ間でのめり込み度と相互協調的幸福感の関連性の相違・類似点を検証し、イベント競技者はすべてののめり込み度要因(魅力、中心性、社会的絆)、イベント愛好者は中心性と社会的絆要因、真剣な競技者は魅力要因のみ、初心者は魅力と社会的絆要因が、相互協調的幸福感とポジティブに関連していたことを明らかにしている。これらの結果から、のめり込み度と相互協調的幸福感の関連性の理解を深めるため、および効果的なMGに関するプロモーションやマーケティング立案のために新たな主観的類型が有効である可能

性をIto (2020)は報告している。

2.2 日本人MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝

Crawford and Godbey (1987)によると、阻害要因は個人的、対人的、構造的の3要因に分類されることが報告されている。個人的阻害要因は、性格や不安、スキル不足、特定の余暇・レジャー活動に対する態度といった個人の心理的状态に基づくものである。対人的阻害要因は、家族や友人などといった他者との対人関係(相互作用)から生じるものである。最後の構造的阻害要因は、施設、金銭、時間、気候などといった外的状況によって生じるものであるとされている。一方、阻害要因折衝は、認知的(認知的不協和の低減等)と行動的(タイムマネジメント等)との2要因に分類され、研究が進められてきた(Jackson et al., 1993)。しかしながら、本当に阻害要因が3要因のみに、阻害要因折衝が2要因のみに分類されるのか、これらの要因を西洋以外の文化圏で援用できるのかといった継続

的な議論が余暇・レジャー学で行われてきた (Casper et al., 2011; Chick et al., 2015; Ito et al., 2018). この議論を深めるため, Ito et al. (2018) は帰納的アプローチに基づくフリーリスト法を用い, 日本人およびカナダ人の余暇時間における身体活動 (LTPA: leisure-time physical activity) の阻害要因と阻害要因折衝に関する新しい類型を報告している. 彼らのテーマ分析から, 心理的, 身体的, ライフスタイル, 対人的, 金銭的, 時間的, 責任的, 環境的, LTPA特有という9要因の阻害要因が, 心理的, 身体的, ライフスタイル, 対人的, 金銭的, 時間的, LTPA特有 (調整), LTPA特有 (マネジメント), LTPA特有 (自己適応) という9要因の阻害要因折衝が明らかになっている.

MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝を対象にした国内の研究においても, 既存の3要因 (阻害要因) と2要因 (阻害要因折衝) に捉われない研究結果が報告されている. 例えば, Ito and Hikoji (2018) は面接調査を通じて, 国内大会参加時には時間的, 身体的, MG特有の阻害要因を, 国外大会参加時にはこれら3要因に加え, 金銭的および旅行的阻害要因を参加者が経験していたことを明らかにしている. 阻害要因折衝については, 国内外問わず参加者が家族的, 時間的, 金銭的, 心理的阻害要因折衝を用いていたことを指摘している. また, 国外MG参加者に焦点を当てた彦次・伊藤 (2018) は, 面接調査を通じて, 仕事や家族に関わる責任が時間的阻害要因として確認されたことを報告している. Ito and Kono (2019) は, 先述したIto et al. (2018) が開発した新たな類型をMG参加の文脈に合わせ修正し, 国外スポーツツーリスト, 国内スポーツツーリスト, スポーツエクスカーションニストの3グループ間で, 阻害要因および阻害要因折衝の類似・相違点を検証している. 具体的に, 身体的阻害要因に関してのみ国外と国内スポーツツーリスト間で有意差は認められなかったが, その他の阻害要因に関しては, 国外スポーツツーリストは国内スポーツツーリストとスポーツエクスカーションニストよりも高い値を示していた. 一方, 阻害要因折衝に関しては, 国外と国内スポーツツーリストが, スポーツエクスカーションニストよりも旅行的およびMG特有 (自己適応) の折衝戦略をより活用していることが明らかになった. このように, 近年, 日本人MG参加者を対象とした阻害要因および阻害要因折衝の研究が数多く報告されているが, これらの研究はすべて客観的類型に基づく調査結果であり, Ito (2020) が提唱したような主観的類型に基づく知見の蓄積が求められる.

2.3 先行研究のまとめとリサーチクエスチョン

以上の先行研究の検討から, MG参加者の類型に関して, これまでの客観的アプローチだけではなく, Ito (2020) やTrauer et al. (2003) の類型のような主

観的アプローチも必要であることが明らかになった. また, Trauer et al.の類型の限界 (類型方法と観戦者カテゴリー) を考慮して提唱された類型 (イベント競技者, イベント愛好者, 真剣な競技者, 初心者: Ito, 2020) に関する知見の蓄積の必要性が示唆された. 同様に, MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝に関して, 国内での知見が蓄積される一方で, これらの研究はすべて客観的類型に基づいて分析されていた. そこで本研究では, Itoが提唱した主観的類型に基づいた4グループ間での日本人MG参加者の阻害要因および阻害要因折衝の類似・相違点を明らかにすることとした. Itoの類型を基にした阻害要因および阻害要因折衝の研究はこれまで報告されていないため, 探索的研究として次の2つのリサーチクエスチョンを設定した.

- リサーチクエスチョン1: MG参加者の阻害要因は, 主観的アプローチの4グループ間でどのように異なるのか.
- リサーチクエスチョン2: MG参加者の阻害要因折衝は, 主観的アプローチの4グループ間でどのように異なるのか.

3. 調査方法

3.1 調査対象者および調査期間

本調査にはオンライン調査法を用いた. 調査対象者はインターネット調査会社に登録している過去3年以内に国内MG (全国大会, 地方大会など大会規模, 競技種目は問わない) に参加経験がある30歳以上の日本生まれ日本育ちの日本人とした. 調査期間は, 2018年10月30日から11月5日までの1週間であった. なお, 本研究で使用したデータはIto (2020) およびIto and Kono (2019) と同一のものである.

3.2 調査項目

MG参加志向に関して, 「これまでにあなたが競技者として参加したマスターズ大会に対する現在のあなたの参加志向について各設問がどれだけあなたに当てはまるか, 5段階でお答えください」という教示文に続き, 「楽しみ志向: 私は大会自体を楽しむために, マスターズ大会に参加する」と「競技志向: 私は大会で結果 (記録や順位) を出すために, マスターズ大会に参加する」を用いた.

阻害要因および阻害要因折衝の調査項目については, Ito et al. (2018) のLTPAの阻害要因および阻害要因折衝の類型を基に開発された尺度 (Kono et al., 2020a, 2020b) をIto and Hikoji (2018) の研究結果を踏まえ修正したものを用いた. Ito et al. (2018) の項目は日本語および日本文化の文脈で開発されただけではなく, 高度な統計手法 (確認的四分分子分析: confirmatory tetrad analysis) を用いて, より実践的

な予測的妥当性 (predictive validity) も検証されている (Kono et al., 2020a, 2020b). また, 調査対象種目に合わせて特有な阻害要因を追加できることは本尺度の利点であり, 先行研究の知見を基にMG参加者に焦点を当てた項目を追加することで, 本研究の文脈に合致した項目へと修正することができた.

具体的に, 阻害要因は「直近であなたが競技者としてマスターズ大会に参加した際に, 大会参加を妨げたり, もしくは妨げそうだったり, 楽しみに悪影響を及ぼした問題について, 以下の項目がどれだけあなたに当てはまるか, 5段階でお答えください」という教示文に続いて, 「心理的問題 (積極的に参加する気がおきない, ストレスを感じる等)」, 「身体的問題 (体の痛み, 競技による怪我, 持病等)」, 「对人的問題 (参加する友人がいない, 家族の理解不足等)」, 「金銭的問題 (お金がない, 大会参加費用が高い等)」, 「時間的問題 (時間がない, 予定を立てにくい等)」, 「旅行的問題 (大会開催地が遠い, 交通アクセスが困難等)」, 「責任的問題 (家庭内 [親, 妻/夫としての] の責任, 他の用事 [地域の用事] 等)」, 「マスターズ大会特有 (大会情報が少ない, 練習不足等)」という8つの阻害要因を尋ねた.

阻害要因折衝は, 「前問でお答えの生じた問題を解決するためにとった方法について, 以下の項目がどれだけあなたに当てはまるか, 5段階でお答えください」という教示文に続いて, 心理的: 「考え方を変える (大会を優先する, 現実を受け止める等)」, 身体的: 「体や健康状態の改善 (休息をとる, 病院へ行く等)」, 对人的: 「大会参加に向けた友人関係の構築 (大会参加に興味のある友人を探す, 今いる友人を大会参加に誘う等)」, 金銭的: 「金銭的状況の改善 (お金の節約, 安価な旅行プランを探す等)」, 時間的: 「時間管理の改善 (他の用事の調整, 仕事時間の短縮等)」, 旅行的: 「旅行的要素を加える (大会参加と旅行を組み合わせる, 観光地として魅力ある開催地の大会を選ぶ等)」, MG特有 (調整): 「参加大会・競技種目の調整 (レベルに合わせた大会を選ぶ, 参加競技種目を変更する等)」, MG特有 (自己適応): 「大会参加に向けた準備 (大会参加を目指し練習をする, いろいろなマスターズ大会の情報を集める等)」という8つの阻害要因折衝を尋ねた. 阻害要因折衝に関しては, 調査参加者の理解度を高めるために平易な言葉を使用した. MG参加志向, 阻害要因, 阻害要因折衝には, 「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」の5段階尺度を用いた. これらの調査項目に加え, 個人属性 (年齢, 性別, 世帯収入) とMG参加競技を尋ねた.

3.3 分析方法

初めに回答パターンを精査し, 18名の阻害要因の回答と22名の阻害要因折衝の回答が全て同一のもの

であったため, これらの回答を欠損値に変更した. 次に, 楽しみ志向 ($M=3.85$) と競技志向 ($M=3.69$) を基に, Importance-Performance分析 (Lai and Hitchcock, 2015; Martilla and James, 1977) を行い, 調査参加者を4グループに分類した. なお, 楽しみ志向と競技志向に関する単変量外れ値は認められなかった (Tabachnick and Fidell, 2007). そして, 類型化された4つのグループごとに, 阻害要因および阻害要因折衝の平均値および標準偏差を算出した. こちらでも, グループごとに単変量外れ値を精査したが, 該当する値は認められなかった. 最後に, この4グループを独立変数, 阻害要因および阻害要因折衝をそれぞれ従属変数として, 一元配置分散分析および多重比較 (Tukey法) を行った. なお, 等分散性を仮定できなかった心理的阻害要因のみ, Welchの検定を用いた. また, Ito and Kono (2019) と同様に, 多重検定による第一種過誤の可能性を下げるため, 有意水準1%を用いた. 本研究の分析には, IBM社のSPSS22を使用した.

4. 結果および考察

4.1 調査対象者の個人的属性および類型結果について

合計で627名が本調査に進む条件を満たし, そのうち有効回答数は449であった (有効回答率71.6%). 男性428名 (95.3%) および女性21名 (4.7%) であり, 平均年齢は39.7歳 (30歳から76歳) であった. 参加競技に関しては, 陸上競技が126名 (28.1%), 水泳が80名 (17.8%), 野球が39名 (8.7%), ゴルフが37名 (8.3%), サッカーが22名 (4.9%), テニスが11名 (2.4%) であった. 世帯収入に関しては, 200万円未満が12名 (2.7%), 200万円以上400万円未満が37名 (8.2%), 400万円以上600万円未満が104名 (23.2%), 600万円以上800万円未満が94名 (20.9%), 800万円以上が144名 (32.0%) であった.

調査参加者の大多数が男性であったが, 日本スポーツマスターズの日本人参加者の男女比は, 2019年大会では男性68.1%, 女性31.9%となっている (日本スポーツ協会, 2020). また, WMGに焦点を当てると, 男女比はさらに均衡化する (e.g., WMG 2017: 男性53%・女性47%, International Masters Games Association, online). 最後の研究の限界でも指摘するが, 本調査に関してはオンライン調査方法によるサンプリングバイアスを考慮する必要がある. 参加競技に関しては, 陸上競技と水泳で半数近くを占めた. 個人で気軽に参加できるという種目特性に加え, 日本スポーツマスターズのような総合MGとそれぞれの種目に特化したMG (日本マスターズ陸上, 日本マスターズ水泳) が毎年開催されていることが理由であると考えられる (彦次, 2018). 最後に, 世帯収入に関して, これまでのMG参加者調査で報告されているように (e.g., Hinch and

表1 分散分析および多重比較 (Tukey法) の結果

	①イベント競技者		②イベント愛好者		③真剣な競技者		④初心者		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
阻害要因										
心理的	3.03	1.29	3.01	1.04	2.98	1.13	3.09	1.06	-	-
身体的	3.33	1.19	3.19	1.08	3.11	1.19	3.21	1.05	-	-
対人的	3.06	1.26	3.19	1.20	3.05	1.24	3.45	1.10	-	-
金銭的	3.35	1.23	3.33	1.06	3.14	1.13	3.34	1.02	-	-
時間的	3.56	1.02	3.37	0.96	3.55	1.04	3.39	1.05	-	-
旅行的	3.49	1.12	3.27	1.14	3.14	1.19	3.31	1.07	-	-
責任的	3.10	1.19	3.17	1.08	3.36	1.08	3.24	1.17	-	-
MG 特有	3.33	1.14	3.20	1.01	3.36	0.92	3.39	1.01	-	-
阻害要因折衝										
心理的	3.50	0.88	3.17	1.08	3.02	1.11	3.07	0.97	6.10*	①>④
身体的	3.42	1.06	3.29	1.07	3.20	1.11	2.94	0.99	4.16*	①>④
対人的	3.54	1.06	3.29	0.96	3.52	1.11	3.53	0.99	1.29	-
金銭的	3.44	1.08	3.39	0.99	3.16	1.10	3.16	1.05	1.87	-
時間的	3.49	1.00	3.45	1.03	3.20	1.00	3.21	0.98	2.17	-
旅行的	3.61	1.05	3.36	1.08	3.34	1.16	3.44	1.00	1.69	-
MG 特有(調整)	3.49	0.97	3.35	1.02	3.11	1.08	3.27	1.04	2.15	-
MG 特有(自己適応)	3.61	1.02	3.39	1.01	3.41	1.02	3.38	0.92	1.76	-

* $p < .01$.

Walker, 2006), 世帯収入が比較的高い参加者が本研究でも多いことが明らかとなった。

Ito (2020) と同様, 参加者を4グループに分類した結果, イベント競技者が228名, イベント愛好者が88名, 真剣な競技者が46名, 初心者が85名となった。各グループの楽しみ志向の平均値と標準偏差は, 次の通りであった: イベント競技者 ($M=4.41, SD=0.49$), イベント愛好者 ($M=4.36, SD=0.48$), 真剣な競技者 ($M=2.76, SD=0.57$), 初心者 ($M=2.41, SD=0.79$)。同様に各グループの競技志向の平均値と標準偏差は, 次の通りであった: イベント競技者 ($M=4.45, SD=0.50$), イベント愛好者 ($M=2.59, SD=0.67$), 真剣な競技者 ($M=4.41, SD=0.50$), 初心者 ($M=2.42, SD=0.78$)。競技の楽しさに加え競技の真剣さによっても動機づけられるイベント競技者(高楽しみ志向・高競技志向)が, 半数以上を占めた結果は日本におけるMG文化が醸成されてきていることを示唆しているかもしれない(彦次, 2018)。

4.2 リサーチクエスチョン1: MG参加者の阻害要因は, 主観的アプローチの4グループ間でどのように異なるのか。

分散分析の結果からは, 全ての阻害要因において有意差が認められなかった: 心理的問題 ($F[3, 423] = 0.10, p > .01$), 身体的問題 ($F[3, 423] = 0.63, p > .01$), 対人的問題 ($F[3, 423] = 2.11, p > .01$), 金銭的問題 ($F[3, 423] = 0.43, p > .01$), 時間的問題 ($F[3, 423] = 1.06, p > .01$), 旅行的問題 ($F[3, 423] = 1.80, p > .01$), 責任的問題 ($F[3, 423] = 0.77, p > .01$), MG特有 ($F[3,$

423] = 0.46, $p > .01$)。これらの結果から, 阻害要因に関して全8項目において4グループ間で類似しているという結果が得られた。つまり, イベント競技者, イベント愛好者, 真剣な競技者, 初心者で経験した阻害要因の程度は異ならないということが明らかになった。この結果は, 客観的類型に基づき国外スポーツツーリスト, 国内スポーツツーリスト, スポーツエクスカージョニストの3グループ間での阻害要因の相違点を明らかにしたIto and Kono (2019) の結果と対照的であった。具体的には, 彼らの研究では同じ8項目の阻害要因のうち, 3つのグループ間で異ならなかったのは時間的阻害要因のみであり, 主に国外スポーツツーリストは国内スポーツツーリスト・エクスカージョニストよりも高いレベルの阻害要因を報告していた。つまり, 同じデータであるにも関わらず, Ito and Kono の客観的類型ではグループ間で阻害要因が異なるのに対し, 本研究の主観的類型ではグループ間で阻害要因は異ならないということである。

客観的類型のグループ間の区分は旅行形態によるものであり (Ito, 2020), 阻害要因は客観的な行動形態に大きく紐づいていることがうかがえる。実際に, MGに対して楽しみ志向であろうが競技志向であろうが, 大会参加のために国外旅行が伴うとその行動に付随する阻害要因(金銭的, 旅行的等)が発生する。そのため, 主観的ではなく客観的類型において, 阻害要因に差が認められたと考えられる。しかしながら, 楽しみ志向という変数が類型化に含まれていたにも関わらず, 心理的阻害要因で有意差が認められなかった点は予想外の結果であった。具体的には, 楽しみ志向が高

いイベント競技者とイベント愛好者は、真剣な競技者と初心者 비해、心理的障害要因は低いことが容易に考えられる。有意差が認められなかった理由として、多くの障害要因研究と同様、本研究でも自己回答法を用い、認知された障害要因 (perceived constraints) を対象にしたという点が挙げられる。実際のMG参加の際には障害要因を経験していたが (experienced constraints)、大会参加後の本調査参加時点ですでに障害要因が折衝されており、障害要因を認知していなかったという可能性が考えられる。つまり、障害要因の理解をさらに深めるためには、MG参加前に調査を行う必要が示唆される結果となった。

4.3 リサーチクエスチョン2: MG参加者の障害要因折衝は、主観的アプローチの4グループ間でどのように異なるのか。

分散分析の結果からは、心理的および身体的折衝のみにおいて有意差が認められた: 心理的 ($F[3, 416] = 6.10, p < .01$), 身体的 ($F[3, 416] = 4.16, p < .01$), 対人的 ($F[3, 416] = 1.29, p > .01$), 金銭的 ($F[3, 416] = 1.87, p > .01$), 時間的 ($F[3, 416] = 2.17, p > .01$), 旅行的 ($F[3, 416] = 1.69, p > .01$), MG特有調整 ($F[3, 416] = 2.15, p > .01$), MG特有自己適応 ($F[3, 416] = 1.76, p > .01$)。有意差が認められた心理的および身体的折衝に行った多重比較の結果から、イベント競技者は初心者よりも両折衝方法において高い値を示していたことが明らかになった。つまり、楽しみ志向および競技志向の両側面が高いイベント競技者が、両側面が低い初心者よりもこの2つの折衝戦略を効果的に活用していることがうかがえる。心理的および身体的折衝はその特徴から個人的 (individual) 障害要因折衝とも呼ぶことができる。障害要因研究ではあるが、Alexandris and Carroll (1997) が心理的および身体的に関する項目が集約された要因を個人・心理的障害要因 (individual/psychological constraints) と命名したように、心理的および身体的障害要因折衝の関係も密接であることが予想される。MG参加志向に基づく主観的アプローチが、このような個人的障害要因折衝のグループ間の相違を大きく反映することはあまり驚く結果ではないと考えられる。つまり、志向性の両側面が高くなればなるほど、個人的状況に関する障害要因をうまくコントロールできるようになることがうかがえる。また、この考察は上記の障害要因で有意差が認められなかった結果の考察のサポートとしても捉えられる。心理的障害要因については上述したが、身体的障害要因に関しては、競技志向が高いイベント競技者の方がトレーニングの負荷が高いため、初心者よりも身体的障害要因が高いことが予想される。しかしながら、イベント競技者は怪我等 (身体的障害要因) をするかもしれないが、その分身体的・医療的知識や適切なストレッチ方

法 (身体的折衝) などを知っているのかもしれない。つまり、障害要因の考察と合わせ、MG参加前後で障害要因と障害要因折衝を調査することが求められる。

なお、障害要因折衝の結果に関しても、客観的類型に基づいたIto and Kono (2019) の結果と異なるものであった。彼らの研究では、心理的および身体的折衝では有意差が認められず、旅行的およびMG特有 (自己適応) 折衝において国外・国内スポーツツーリストがエクスカージョニストよりも高い値を示していたことを報告していた。Ito and Konoは、旅行的折衝に関しては大会参加旅行への休暇の取り込みが、MG特有 (自己適応) 折衝においても魅力ある大会開催地を選ぶという旅行的行動が反映されいるためだと考察している。これらの2つの障害要因折衝は、主観的行動統制感 (国外MGに参加経験が多ければ、国外旅行も国外MG情報収集も容易になる等) に大きく関連していたため (Ajzen and Driver, 1992)、旅行形態に基づく客観的類型では有意差が認められたと考えられる。実際に、主観的類型を独立変数としたフォローアップ分散分析を行ったところ、3年以内の国外大会参加回数 ($F[3, 192] = 0.71, p > .01$)、宿泊を伴う国内大会参加回数 ($F[3, 265] = 0.44, p > .01$)、日帰り国内大会参加回数 ($F[3, 273] = 0.16, p > .01$) の全てで有意差は認められなかった。つまり、主観的類型に基づくグループ間では旅行形態が類似していたことから、本研究では旅行的およびMG特有 (自己適応) 折衝で有意差が認められなかったと考えられる。

5. 結論

本研究の目的は、主観的類型に基づいた4グループ間における日本人MG参加者の障害要因および障害要因折衝の類似・相違点を明らかにすることであった。本研究の目的を達成するために、過去3年以内に国内MGの参加経験がある30歳以上の日本人を対象に、オンライン調査を行い、449名から有効回答を回収し、分析を行った。先行研究の検討を基に設定した2つのリサーチクエスチョンに答えるために、Importance-Performance分析から得られた4グループ (イベント競技者、イベント愛好者、真剣な競技者、初心者) を独立変数とした一元配置分散分析と多重比較を行った。本研究の結果を要約すると以下の通りになる。

- イベント競技者、イベント愛好者、真剣な競技者、初心者間で、障害要因は異ならなかった。
- イベント競技者は初心者よりも、心理的および身体的折衝を活用していた。

これまで、スポーツイベント大会参加者の動機や再参加意図などの促進要因に関わる研究成果は国内においても数多く蓄積されてきた (e.g., 野川, 1992; 山口

ほか, 2011)。しかしながら, その逆の視点である阻害要因に関しては, 近年研究が蓄積されてきたものの (e.g., 備前ほか, 2016; 山口ほか, 2018), 等閑視されてきた傾向にある。これに加え, 理論に基づくスポーツツーリズム研究が求められる日本において (伊藤・Hinch, 2017), 主観的類型の視点からMG参加者の阻害要因および阻害要因折衝の知見を蓄積したという理論的意義を本研究は有する。客観的類型を使用した場合は阻害要因で多くのグループ差が報告されていたが (Ito and Kono, 2019), 本研究において主観的類型を使用した場合は阻害要因折衝のみでグループ差が確認されるという新しい知見をもたらした。加えて実践的意義に関しても, これらの結果から日本人MG参加者の阻害要因に関連するMGプロモーション活動には客観的類型, 阻害要因折衝に関連するMGプロモーション活動には主観的類型に基づくセグメンテーションマーケティングが有効であることが示唆された。特に, 本研究の結果からイベント競技者は初心者に比べ, 心理的および身体的折衝を積極的に活用していることから, イベント競技者の阻害要因折衝方法に関する豊富な経験を, MGキャリアの始まりに位置する初心者に伝えるような機会 (ワークショップ等) を設けることが, MG参加者の底上げやプロモーションに効果的だと考えられる。WMG関西組織委員会は, WMGオークランド, アジアパシフィックMGペナン, パンパシフィックMGなどWMG関連大会の参加経験者・関係者間での情報交換等を目的とした「ワールドマスターズゲームズ参加者の集い」を開催している (ワールドマスターズゲームズ2021関西組織委員会, online b)。このようなイベントにおいて, 初心者に分類される参加者を多く集め, イベント競技者に分類される参加者の貴重な情報を彼らと共有することで更なる効果が期待できるかもしれない。最後に強調したい点は, 主観的・客観的類型に関して, 一方が他方よりも優れているという優劣はないということである。セグメンテーションマーケティングはそれぞれの目標に基づいて行われるべきであり, 主観的類型が効果的な目標 (MG参加の阻害要因折衝等) もあれば, 客観的類型が効果的な目標 (MG参加の阻害要因等) もあることに注意する必要がある。

本研究における主要な研究課題として, 先述したように, 調査参加者の大多数が男性であったことが挙げられる。そのため, 本研究結果を一般化するためには, MG会場での直接配布直接回収法など, オンライン調査法とは異なる方法での追試が求められる。加えて, 質問項目の設定に関して, 「現在」の参加志向が「過去」のMG参加時点での阻害要因と阻害要因折衝とマッチしていない可能性も十分に考えられる。これらの研究の限界に留意しながらも, 本研究結果が国内のマスターズスポーツのプロモーションに役立つことが

期待される。

付記: 本研究はJSPS科研費16K21172の助成を受けたものです。

6. 引用文献

- Ajzen, I. and Driver, B. L. (1992) Application of the theory of planned behavior to leisure choice. *Journal of Leisure Research*, 24: 207-224.
- Alexandris, K. and Carroll, B. (1997) An analysis of leisure constraints based on different recreational sport participation levels: Results from a study in Greece. *Leisure Sciences*, 19: 1-15.
- 備前嘉文・二宮浩彰・庄子博人 (2016) 市民マラソンランナーが都市型市民マラソン大会への参加を検討するにあたり生じる構造的制約. *生涯スポーツ学研究*, 13(2): 1-14.
- Casper, J. M., Bocarro, J. N., Kanters, M. A., and Floyd, M. F. (2011) Measurement properties of constraints to sport participation: A psychometric examination with adolescents. *Leisure Sciences*, 33: 127-146.
- Chick, G., Hsu, Y. C., Yeh, C. K., and Hsieh, C. M. (2015) Informant-provided leisure constraints in six Taiwanese cities. *Journal of Leisure Research*, 47: 501-512.
- Crawford, D. W. and Godbey, G. (1987) Reconceptualizing barriers to family leisure. *Leisure Sciences*, 9: 119-127.
- Gibson, H. J., Willming, C., and Holdnak, A. (2003) Small-scale event sport tourism: Fans as tourists. *Tourism Management*, 24: 181-190.
- Higham, J. E. S. and Hinch, T. D. (2018) *Sport tourism development (3rd ed)*. Channel View Publications.
- 彦次佳 (2018) マスターズスポーツ. 川西正志・野川春夫編, *生涯スポーツ実践論 (第4版)*. 市村出版, pp. 185-189.
- 彦次佳・伊藤央二 (2018) 国外マスターズスポーツ大会参加者の阻害要因および阻害要因折衝: World Masters Games 2017 Auckland参加者の事例報告. *生涯スポーツ学研究*, 15(2): 49-55.
- Hikoji, K., Chogahara, M., Tani, M., Sonoda, D., Matsumura, Y., Okada, A., Takada, Y., and Ishizawa, N. (2012) The multidimensional benefits of participation in masters sports: A case study of the "Masters Koshien". *International Journal of Sport and Health Science*, 10: 90-101.
- Hinch, T. and Ito, E. (2018) Sustainable sport tourism

- in Japan. *Tourism Planning and Development*, 18: 96-101.
- Hinch, T. and Walker, G. (2006) Motivations, travel behaviours and socio-demographic profiles of athletes registered for the Edmonton 2005 World Masters Games. <https://d3tfdru9q5sbcz.cloudfront.net/2019/11/Socio-demographic-profile-of-Athletes-at-WMG-2005.pdf>, (参照日 2020年12月14日)
- International Masters Games Association. (online). WMG Auckland 2017: Final report. <https://d3tfdru9q5sbcz.cloudfront.net/2019/11/Auckland-WMG-2017-Final-Report.pdf>, (参照日 2020年12月14日)
- Ito, E. (2020) Relationships of involvement and interdependent happiness across a revised Masters Games participant typology. *Journal of Sport & Tourism*, 24: 235-250.
- Ito, E. and Hikoji, K. (2018) Constraints and constraint negotiation when participating in domestic and international masters games. *International Journal of Sport and Health Science*, 16: 120-127.
- Ito, E. and Hikoji, K. (2019) Relationships of involvement and interdependent happiness between domestic and international Japanese masters games tourists. *Annals of Leisure Research*, doi: 10.1080/11745398.2019.1610665
- Ito, E., & Higham, J. (2020) Supplemental tourism activities: A conceptual framework to maximise sport tourism benefits and opportunities. *Journal of Sport & Tourism*, 24: 269-284.
- 伊藤央二・Hinch, T. (2017) 国内スポーツツーリズム研究の系統的レビュー. *体育学研究*, 62: 773-787.
- 伊藤央二・藤森美月 (2019) 諏訪湖マラソン大会参加者のマラソン大会参加動機と観光動機に関する研究：参加者の宿泊と同伴者の有無に着目して. *生涯スポーツ学研究*, 16(2): 1-11.
- Ito, E. and Kono, S. (2019) Similarities and differences in constraints and constraint negotiation among Japanese sport tourists: A case of masters games participants. *Journal of Sport & Tourism*, 23: 63-77.
- Ito, E., Kono, S., and Walker, G. J. (2020) Development of cross-culturally informed leisure-time physical activity constraint and constraint negotiation typologies: The case of Japanese and Euro-Canadian adults. *Leisure Sciences*, 42: 411-429.
- Jackson, E. L. (2005) Leisure constraints research: Overview of a developing theme in leisure studies. In: Jackson, E. L. (ed.) *Constraints to leisure*. Venture Publishing, pp. 3-19.
- Jackson, E. L., Crawford, D. W., and Godbey, G. (1993) Negotiation of leisure constraints. *Leisure Sciences*, 15: 1-11.
- 川西正志・長ヶ原誠・北村尚浩 (1993) マスターズスイマーのスポーツ的ライフスタイル：過去のスポーツ経験の影響を中心に. *スポーツ社会学研究*, 1: 49-61.
- Kleiber, D. A., Walker, G. J., and Mannell, R. C. (2011) *A social psychology of leisure* (2nd ed.). Venture Publishing.
- 児嶋恵伍・伊藤央二 (2019) レジャー参加パターン間におけるマスターズ大会参加者の大会参加へのめり込み度と相互協調的幸福感の関連性について：オンライン調査を用いた事例研究. *生涯スポーツ学研究*, 16(1): 11-20.
- 児嶋恵伍・伊藤央二・吉村実佳・藤森美月・坂本直斗 (2019) 日本人国外スポーツツーリストのサプリメント観光行動に関する阻害要因：アジアパシフィックマスターズゲームズ2018ベナン大会の日本人参加者の事例研究. *観光学*, 21: 27-34.
- Kono, S., Ito, E., and Loucks-Atkinson, A. (2020a) Are leisure constraints models reflective or formative?: Evidence from confirmatory tetrad analyses. *Leisure Sciences*, doi: 10.1080/01490400.2018.1474508
- Kono, S., Ito, E., Walker, G. J., and Gui, J. (2020b) Predictive power of leisure constraint-negotiation models within the leisure-time physical activity context: A partial least squares structural equation modeling approach. *Journal of Leisure Research*, 51: 325-347.
- Lai, I. K. W. and Hitchcock, M. (2015) Importance-performance analysis in tourism: A framework for researchers. *Tourism Management*, 48: 242-267.
- Martilla, J. A. and James, J. C. (1977) Importance-performance analysis. *Journal of Marketing*, 41: 77-79.
- 日本スポーツ協会 (2020) 日本スポーツマスターズ 2019 ぎふ清流大会 参加者人数一覧. <https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/supotsu/doc/masters2019/participants2019.pdf>, (参照日 2020年12月14日)
- 日本スポーツ協会 (online) 日本スポーツマスターズ 過去大会の概要. <https://www.japan-sports.or.jp/masters/tabid196.html#2016>, (参照日 2020年12月14日)
- 野川春夫 (1992) スポーツ・ツーリズムに関する研究

2020年12月23日受付
2021年1月12日受理

- ホノルルマラソンの縦断的研究. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 7: 43-55.
- Nogawa, H., Yamaguchi, Y. and Hagi, Y. (1996) An empirical research study on Japanese sport tourism in sport-for-all events: Case studies of a single-night event and a multiple-night event. *Journal of Travel Research*, 35: 46-54.
- Pearce, P. L. (1982) *The social psychology of tourist behaviour*. Pergamon Press.
- Ryan, C. and Lockyer, T. (2002) Masters' Games: The nature of competitors' involvement and requirements. *Event Management*, 7: 259-270.
- Schneider, I. E. and Wilhelm Stanis, S. A. (2007) Coping: An alternative conceptualization for constraint negotiation and accommodation. *Leisure Sciences*, 29: 391-401.
- Tabachnick, B. G. and Fidell, L. S. (2007) *Using multivariate statistics* (5th ed). Allyn and Bacon.
- Trauer, B., Ryan, C., and Lockyer, T. (2010) The south pacific masters' games - competitor involvement and games development: Implications for management and tourism. *Journal of Sport & Tourism*, 8: 240-259.
- ワールドマスターズゲームズ2021関西組織委員会 (online a) 大会情報：開催概要. <https://wmg2021.jp/games/index.html>, (参照日2020年12月14日)
- ワールドマスターズゲームズ2021関西組織委員会 (online b) ニュース：参加者募集！！「ワールドマスターズゲームズ参加者の集い 12月15日(土) 東京開催」. <https://www.wmg2021.jp/news/detail?id=421>, (参照日2020年12月22日)
- 山口志郎・松村浩貴・土肥隆・伊藤克広・船越達也 (2018) スポーツイベントボランティアの阻害要因. *生涯スポーツ学研究*, 15(1): 25-38.
- 山口志郎・佐々木朋子・山口泰雄・野川春夫 (2011) マラソンランナーの参加動機とPush-Pull要因に関する研究：NAHAマラソンにおける県内・県外参加者に着目して. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 4: 291-301.
- 山北隆太郎・長ヶ原誠 (2018) マスターズスポーツにおけるイベントマネジメントの日豪比較. *生涯スポーツ学研究*, 15(2): 23-36.
- 山根真紀・武田文 (2014) マスターズスキーの現状. *スキー研究*, 11: 45-50.
- Young, B. W., Bennett, A., and Séguin, B. (2015) Masters sport perspectives. In: Parent M. M. and Chappelet, J.-L. (eds.) *Routledge handbook of sports event management: A stakeholder approach*. Routledge, pp. 136-162.